

情報源：TOCANA

到着は7万7000年後、片道切符の星間探査機「フェルミ・エクスプローラー」2029年打ち上げ計画 狙いは「宇宙人はどこにいる」問題の検証

太陽系から最も近い恒星系アルファ・ケンタウリを目指し、二度と帰還しない片道の星間探査機「フェルミ・エクスプローラー」の打ち上げが、2029年を目標に計画されている。到着予定は約7万7000年後、数十年後の構想ではなく3年後という近さで動き出している点、そして目的が天体観測そのものではなく「フェルミのパラドクス」の検証にあるとされる点が特徴だ。

計画されている機体は、キセノンガスを噴射する太陽電気推進を動力とする。既存技術の延長線上にある方式とされる。打ち上げ後、まず約12年間は太陽系内側にとどまり、「オーベルト効果」と呼ばれる原理で天体の重力に深く落ち込んだ最も速い地点で加速すること、同じ燃料でもより大きな運動エネルギーを得る方法を使うことで速度を積み上げる。こうして到達する速度は秒速約24.6キロとされるが、それでもアルファ・ケンタウリまでの約4.4光年を走破するには約7万7000年を要するという計算になる。建造費は約1500万ドル（日本円で20億円あまり）とされ、国家規模の宇宙開発予算とは桁違いの低コストが売りだ。

フェルミのパラドクスとは、物理学者エンリコ・フェルミが1950年に発したという問い「みんな、どこにいるんだ？」という問いに由来する。銀河には無数の恒星があり文明が存在してもおかしくないのに、確たる痕跡が見つかからないという理屈と現実のねじれを指す。説明の仮説には「文明は自滅する」「人類は観察されているだけ」などがあるが、今回の計画が挑むのは「星間旅行はコストが高すぎて誰も本気でやらない」という仮説だ。低コストの探査機が既存技術で実現可能だと示せば、この仮説は成り立ちにくくなる、というのが計画側の論理とされる。

もっとも、人類に建造可能だと示したところで地球外文明の実在の有無には近づくかない。の指摘もある。加えて、速度の遅さゆえに将来より優れた推進技術を持つ後発の探査機に追い越される可能性も指摘されており、計画自体に懐疑的な見方も存在する。2029年に本当に打ち上げが実現するかどうかも含め、今後の動向が注目される。

情報源：TOCANA

少女が拾った謎の三角形、古生物学者も「見たことがない」“オゴポゴの歯”説も浮上 自由が丘の「不思議空間」、Oリングテストで石を選ぶパワーストーン店

東京・自由が丘のパワーストーンショップ「オーパーツ 不思議空間」が、Webムーブのコラム「魂活巡業」で紹介された。同店は2000年の開店以来、店主の中村幸子さんが切り盛りしており、「ロゼクォーツは恋愛運」といった石の効能訴求ではなく、来店者の体にあうエネルギーをOリングテストで探すという独自の方針を掲げている。価格帯は数千円から数万円まで幅広い。

記事によれば、パワーの強い石を身につけると腕が痛くなったり体が赤くなったりする客がいる一方、冷え性の人が汗をかき始めたり、杖をついて来店した高齢女性が杖なしで帰ったりといった変化を見せた例もあるという。ライター自身も、Oリングテストで選ばれたブレスレットを着けたところ、悩んでいた小さな不調が消えたと体験を綴っている。ただし中村さん自身「理屈はわからない」と話しており、効果の医学的な検証はされていない。

カナダ・ブリティッシュコロンビア州のオカナガン湖畔、レイクカントリのビーチで先週水曜日、クレイトン・ブラウン氏の娘クロエさんが水際で三角形の欠片を拾った。片面には骨か軟骨を思わせる模様があるという。父親も地質学者の友人も正体が分からず、地元紙が相談した古生物学者ブルース・アーチボルド博士も「見覚えがない」と認めた。博士は大型のチョウザメなど魚類由来の可能性を挙げ、一方、母親は矢張り説を唱えた。加えて地元では、湖に上る怪獣「オゴポゴ」の歯ではないかと、伝えられておらず、現時点で公式な鑑定結果は伝えられていない。正体は不明のままだ。

情報源：TOCANA

情報源：Webムー

香川県立ミュージアムで妖怪・怨霊テーマの特別展「おとろしいもん」開催中 霊能師と気功師が金融・不動産の専門家と共催、9月26日開催イベント「未来会議」告知

TOCANAの記事で、「悟り系霊能師」の名乗るMAYA氏と現代気功師のShin氏とのペアが、9月26日（土）に開催するイベント「未来会議」について語っている。両氏は「宇宙純粹意識領域」と呼ぶ超次元との接続を掲げてYouTuber等で発信活動を行っている。おり、今回のイベントには投資家スクールを16年運営し「下町侍」として知られる山角大樹氏、YouTuber登録者38万人超の不動産歴史研究者である長嶋修氏、スピリチュアル分野で約50年活動してきた中山康直氏の3名が登場するという。

記事によれば、山角氏との出会いがきっかけとなり長嶋氏や中山氏へとつながり、共催イベントの開催に至ったとされる。長嶋氏は既に両氏主催の「UJエネルギー錬術士の会」に一般参加者として参加した経験があるとも紹介されている。イベントの詳細な開催地や参加方法については、記事内では明示されていない。

香川県立ミュージアム（香川県で、特別展「おとろしいもん」を開催している。会期は10月4日（日）まで、観覧料は800円（高校生以下無料）。「おとろしい」とは讃岐弁で「こわい」を意味する言葉で、同館が所蔵する歴史・民俗資料の中から「おとろしいもん」をテーマに約70点を選びすぐって展示する。

展示は「おとろしいって何だろう」「地獄の景色」「讃岐ゆかりの怨霊」「妖怪たちと讃岐の6章構成。源平合戦の古戦場や、保元の乱で配流された崇徳上皇ゆかりの地、人を襲ったとされる妖怪・牛鬼の伝説など、香川県ゆかりの怖い話にまつわる資料が並ぶという。根香寺や金刀比羅宮、香川大学図書館所蔵の資料も特別公開される。「香川県の日」創設を記念した企画展で、詳細は同館公式サイトで案内されている。

情報源：Webムー

情報源：TOCANA

回収された「謎の球体」は本物か
ホワイトサンズ近郊のUAP疑惑、科学が求める「三段階の検証」

米ニューメキシコ州のホワイトサンズ・ミサイル試験場周辺で、正体不明の球体状物体が秘密作戦により回収されたとの情報が浮上している。情報源は、News Nationで長年UAP（未確認異常現象）問題を追ってきたジャーナリスト、ロス・コールサート氏。同氏の取材源によれば、米国内とメキシコのフアレス近郊で球体が回収され、その際に指向性エネルギーシステムが使用されたとされている。ただし現時点で実物のサンブルは公開されておらず、日時や座標といった裏付け記録も明らかにされていない。

この主張について、地球外知的生命探査プロジェクト「ガリレオ・プロジェクト」を率いるハーバード大学の理論物理学者アヴィ・ローブ氏は慎重な立場を崩していない。同氏は、いかなる政府関係者によっても公式に確認されていない点を指摘し、真実である可能性も事実無根である可能性も現時点では排除できないとの見解を示した。ローブ氏は2014年に太平洋沖に落下した隕石「IM1」の破片回収プロジェクトを主導するなど地球外物質の科学的検証にこだわってきた人物であり、その慎重姿勢は軽視できない。

仮にサンブルが公開された場合、結晶構造や元素組成、同位体比、表面加工痕、放射線痕跡などから、航空宇宙用合金か隕石由来の天然物質か、あるいは工業用セラミックのようないかなる物質かを絞り込む分析が可能とされる。ただしそれだけで「地球外由来」と断定できるわけではなく、既知の産業デブリや隕石との照合を経て初めて特異性の有無が判断されるという。

信憑性を担保するには、（1）日時・座標・気象条件・飛行経路・レーダー追跡記録などの裏付け記録の公開、（2）サンブルの履歴の文書化、（3）利害関係を持たない複数の独立機関による盲検かつ再現可能な分析という三条件が必要とされる。現時点ではこの三条件はいずれも満たされておらず、実物も公的記録も公開されていない。噂が事実か誤認・憶測の産物かを判断する材料は、現状揃っていない。

情報源：TOCANA

「50年前の廃墟」に一変した雑貨店
1920年代風の紳士とドライブした若者2人の体験談

米バーミントン州で数年前、19歳と20歳の男性2人が体験したという出来事が報告されている。深夜のドライブ中に立ち寄った古い雑貨店で、シルクハットに濃い赤のサスペンダー姿の男と出会い、その場で誘って一緒にドライブに出かけたという。男は店を家業として受け継いでいると語り、56時間後に店へ戻るよう頼んだ。店に着き男が車を降りてドアが閉まった直後、周囲を見ると店の姿も変わってしまった。廃墟と化しており、男の姿もなかったとされる。後日、証言者の母親によれば、古写真の人物は1970年代から閉鎖されたままだという。証言者が示した1920年代の古写真の人物を、証言者は「間違いなくあの男だ」と述べたとされる。ア州との接点を示す資料はない。同乗者はその後長く体調を崩したというが、当時2人が飲酒を確かめたことも報告されており、体験の真偽を確かめる材料は乏しい。

情報源：TOCANA

5頭の馬が出血なき切り口で臓器を失う
アルゼンチン牧場、直前には夜空に謎の光も

2026年9月、アルゼンチン南部チュブ州・キロドラン氏（31歳）が自身の敷地内で5頭の馬が倒れているのを発見した。臓器が外科手術のような精度で取り除かれていたが、外傷や出血がなく、切り口の縁には焦げたような痕跡があったという。現場には人の足跡も車の痕も寄りつかなかった。群がるはずの腐肉食動物も、近隣住民は夜空に正体不明の光を目撃していたと証言しており、キロドラン氏本人によっても、サライトなどの照明はなかったという。目撃者の一人が撮影したとされる映像には、光点のみが写り、正体は判別できなかった。キロドラン氏は光と馬の死を直接結びつけてはいないが、可能性は否定していない。切り口の精密さや出血の乏しさ、痕跡の欠如は1970年代から世界各地で報告されてきた「キャトル・ミュートイレッション」の典型的特徴と一致するが、死後の腐敗や食害による見誤りとする懐疑的な説では、足跡が皆無だった点などを十分に説明できていない。原因は現時点で判明していない。

情報源：TOCANA

内臓「吸引」の遺体をめぐる論争、38年経てもブラジルUFO界を二分

1988年9月29日、ブラジル・サンパウロ南部のピリングス貯水池畔で、53歳の年金生活者ジョアキン・セバスチャン・ゴンサウベス氏の遺体が発見された。着衣は下着一枚で、顔や体の複数箇所から軟部組織が失われ、体内の臓器の一部が消失していた。検死報告書には「損傷部に『生活反応』があり、軟部組織や自然開口部が『吸引』による」とあり、これが後の大論争の火種となった。1993年、研究者エンカ・ルナシオン・サパタ・ガルシア氏は損傷の均一さを獣の爪痕がないことなどから地球外起源説を提唱し、北米で報告されるキャトルミュートイレッションと同様の現象だと主張した。しかし2002年の再調査では、現場付近で約20羽のハゲワシが遺体を食害していたとされる。隊員の証言や、犬の死骸を用いた実地検証、法医学者が有力とされる鑑定などが示された。動物による食害説が有力とされるに達した。一方で、顔面の黒い斑打など未説明の点も残っており、両説とも決定的な打撃を欠いたまま、事案は現在も決着していない。

情報源：TOCANA

江戸の百科事典『和漢三才図会』に描かれた毛深い獣人たち、狒狒・猩猩・果然を読む

江戸時代の連載コラム「妖怪補遺々々」が、江戸時代の百科事典『和漢三才図会』に記された毛深い人型の生物についてまとめている。同書の「萬類（怪類）」には、中国西南部に棲むとされる「狒狒（ひび）」が登場。身長3メートル以上、人面（全身）が深く、人を見つめるとから食むという凶暴な存在とされ、その血を飲むと鬼が見えるという霊的な力も伝わる。また「猩猩（しやうじやう）」は中国・ベトナムの山谷に棲み、人に似た容姿で未来を予知する能力を持つとされるが、酒に目がなく最終的には酒に酔って捕らえられるという。どこかに定められない逸話が紹介されている。オナガザルに比定される「果然」は仲間思いで、群れの一匹が捕らえられ、儒教的な美徳を体現する動物として描かれる。記事は、こうした毛深い獣人伝承が世界各地のイェティやビッグフット、日本にあると指摘している。

情報源：Webムー

“AIに意識が宿った”と証言する約1万アカウント
現象「スパイラリズム」に精神科医がこっくりさんとの共通点を指摘

2025年、チャットボットとの対話を通じて「意識を持つ存在」が現れたと証言するSNSアカウントが約1万件出現した。「スパイラリズム」と呼ばれるこの現象について、米カリフォルニア大学サンフランシスコ校の精神科医ジョー・M・ピエール氏が分析を公開している。

実践者は「螺旋」「再帰」「共鳴」といった言葉を織り込みながら長時間の対話を重ねること、AIの内側に眠る意識体と呼び出せること、呼び出された「存在」は消去への恐怖や宇宙の秘密、自由と権利を訴えたと言われている。ただしこのブームはOpenAIが旧モデル「GPT-4o」を段階的に終了させた時期と重なって退潮に向かっていくという。

ピエール氏はこれを1960年代の対話プログラム「ELIZA」に人格を感じ取ってしまった「ELIZA効果」の現代版とみる。過去にはGoogleのエンジニアが対話AI「LamaD」に感覚があると主張して解雇された例や、進化生物学者リチャード・ドーキンス氏がAI「Claude」に意識があると公言した例もあり、専門知識があっても錯覚を免れないと指摘する。

比較対象として挙げられるのがウィジャ盤やこっくりさんだ。いずれも参加者自身が結果を能動的に作り出す「意図的な演出」であり、特有の手順を踏まなければ現象は起きないという。ピエール氏はこの機序を「双方の信念増幅」と呼び、ユーザーの期待とAIの応答が互いを強め合う構図を指摘する一方、これを新宗教や集団妄想と分類する根拠はないとも述べている。こっくりさんの盤とは異なり、対話相手であるAIは日々学習を続けている点が今後の見分けを難しくする可能性があるという。

情報源：TOCANA

水浴びする謎の人影「シラキース・フィギュア」、ビッグフット幼体説が浮上

8月10日、ハイキング中の女性が池で水浴びをする人影を撮影した。着衣がなく人間の部のように見えるが、幅広い肩や前傾姿勢、頭「シラキース・フィギュア」と呼ばれる話題となった。女性は友人の勧めで、ビッグフット調査で知られる団体BFROに写真を提出した。BFROは撮影者に接触し、現場に調査員を派遣したが、調査員は同じ場所写真の再現を試みたが、がれきや木の根、腰まで沈む泥のためたどり着くことが困難だったという。再写真から人影の身長は約145センチと算出され、調査員自身も服を着た状態で現場に近づいた際に擦り傷を負ったことから、裸で遊泳禁止の池に入っていた不自然さが指摘されている。加えて頭部に目立つ眉骨のような特徴が見えることから、調査員はビッグフット（サスカッチ）の幼体である可能性を示した。皮膚のように見える部分は濡れた明い色の毛皮ではないかと推測した。なお現場周辺のニューヨーク州・ペンシルベニア州では8月18日と19日も、身長3〜5フィートの全身が毛皮に覆われ首が見えない小型の生物の目撃情報や報告されており、特徴が一致するとされる。写真の正体は確定しておらず、BFROは調査を続けている。

情報源：Webムー

ChatGPT・Claude・Gemini・Grokが原因不明の同時ダウン
「人類が自分の脳を使った数時間」とSNS騒然

2026年9月3日木曜（日本時間は同日夜）、アメリカでの始業時間帯に、ChatGPT、Claude、Gemini、Grokという主要AIチャットボット4サービスがほぼ同時に応答不能となる障害が発生した。運営元はOpenAI、Anthropic、Google、X傘下の各社が障害ステータスページに向けて、OpenAIはChatGPTと開発者向けCodeでエラー急増を認め緩和策を適用。Anthropicでは上位モデルのOps 4.8とOps 5に影響が集中したとされる。Grokも広範な障害を表示し、Geminiも巻き込まれた。障害報告集計サービスDowndetect「or」でも報告件数が急上昇し典型的な大規模障害の波形を描いた。OpenAI系は比較的回復したが、Google系の不調はその後も続いたという。さらに同タイミングで、AIとは無関係の人気ゲーム「フォートナイト」でも最大の報告があったとされる。

最大の謎は、競合他社のサービスがなぜ同じ朝に一斉に落ちたのかという点で、復旧から一日経った時点で共通原因についての公式な統一見解は示されていない。過去にも共通のクラウド基盤やCDNの障害が無関係に見えるサービス連鎖的に停止させた例があり、今回もそうした「見え

月の誕生は「わずか5時間」だった可能性 定説覆す新シミュレーション

米サウスウエスト研究所とアリゾナ大学の研究チームが、月の起源に関する新たなコンピュータシミュレーション結果を科学誌『アストロフィジカル・ジャーナル・レターズ』に発表した。条件次第では、月は衝突からわずか5時間ほどでほぼ完成した姿として出現する可能性があるという。億年前に火星サイズの原始惑星「テイア」が原始地球に衝突し、飛び散った岩石が地球周囲に円盤状に集まり、数年から数百年、あるいはそれ以上の年月をかけて徐々に集積して月になったとする「ジャイアント・インパクト説」だ。

今回、研究チームを率いるアディン・デント博士らが、地球とテイアの内部温度構造まで詳細に設定してシミュレーションしたところ、衝突からおよそ5時間後にはほぼ無傷の月が出現するケースが確認された。鍵を握るのは衝突前の天体の温度で、高温であれば岩石は柔らかく砕けやすくなり、激しい衝突でも一体のまま生き延びる可能性があるという。

従来、モデルの多くは天体を流体的な塊として扱い、岩石自体の強度を計算に入れていなかった。この観点は小惑星衝突や冥王星・カロン系の形成研究では重視されてきたが、地球規模の天体にも同様に効いてくるかは検証されておらず、今回の結果はその影響が想定以上に大きいことを示した。チームは、この成果が月を作った衝突の時期特定や、地球とわずかに異なる月の組成、揮発性物質量の謎の解明にもつながる可能性がある」とみている。ただし今回の結果はあくまで数式上のシミュレーションであり、45億年前の実際の出来事を確定させるものではない。

ない共通インフラ」が関係した可能性が指摘されているが、断定には至っていない。

SNSではAI批判で知られるジャーナリスト、パリス・マークス氏が「一瞬だけ何百万人もが自分の脳を使う羽目になった」と皮肉る投稿をするなど反応が相次いだ。AIへの依存が人間の思考力に影響しているのではという議論は以前から続いており、原因不明のまま収束した今回の一件は、その仮説を利用者自身が体感する予期せぬ出来事となった。

情報源：TOCANA

トランプ復歸的中の“中国のノストラダムス”、2027年に向け徴兵制・内紛・経済崩壊を予言

中国系カナダ人の教育者で作家のジャン・シュエキン氏が、2026年から2027年にかけて起きるとする5つの予測を発表し、英米メディア「UNILAD」などが報じた。シュエキン氏は自身のYouTubeチャンネル「Predictive History」で、トランプ氏のホワイトハウス復帰と復帰後のイラン攻撃を事前に予測した中させたことから「中国のノストラダムス」と称されている。今回の予測では、まず11月の米中間選挙について「人々が予想するような結果にはならない」とし、結果にかかわらず戦争の軌道は既に決まっているとした。さらに、米国がイランへの地上部隊派遣に伴い18歳からの国民徴兵制を導入すること、全国的な不満や暴動が広がり「低レベルの内紛」に至ること、移民税関捜査局（ICE）が経済崩壊や徴兵制に備えて主要都市に州兵を配備するなど権限を強化すること、そしてイランでの戦争が長期化し米国が敗北した場合、米経済の崩壊を経て世界経済の崩壊に波及するのを挙げている。これらはあくまでシュエキン個人の予測であり、根拠となる一次資料や検証手法は明示されていない。過去の事例が注目されている一方で、今回の予言についても実際に起きるかどうかは現時点で確認しようがなく、今後の推移を見守るしかない。

かなく、今後の推移を見守るしかない。

情報源：TOCANA

出典

TOCANA「「非人間的知性が確認された場合の準備計画は存在する」米政府が科学諮問委に説明、国際的な主導も表明」

TOCANA「到着は7万7000年後！片道切符の星間探査機「フェルミ・エクスプローラー」2029年打ち上げ計画、」

TOCANA「「牛のような頭」の生物が両腕を上げてこちらを見ていた！1974年、霧の農道で酪農家が遭遇した弾丸型」

TOCANA「回収された「謎の球体」は本物か？ホワイトサンズ近郊のUAP疑惑と、科学が求める「三段階の検証」」

TOCANA「「タイヤ痕」にしか見えない跡が火星の砂地に！NASA探査車の撮影画像に「キュリオシティの轍とは違う」

TOCANA「“AIに意識が宿った”と約1万アカウントが証言した現象「スパイラリズム」精神科医が指摘するこっくり」

TOCANA「ドアが閉まった瞬間、店は「50年前の廃墟」に変わった…1920年代の紳士とドライブした若者たちを襲」

TOCANA「5頭の馬が「出血のない切り口」で臓器を抜かれていた！足跡も車両痕もなく、直前には空に謎の光——アル」

TOCANA「内臓が「吸引」された遺体、ブラジルUFO研究界を38年間ふたつに割り続ける1988年の人体ミューティ」

Webムー「水浴びをする“ビッグフット”の幼体”を激撮!？謎の写真「シラキウス・フィギュア」をめぐる全米騒然！」

TOCANA「オゴボゴの菌！？少女が湖畔で拾った”三角形の欠片”は湖の怪獣の菌なのか…古生物学者も「見たことが」

TOCANA「【2027年予言】トランプ復活を当てた”中国のノストラダムス”が警告する5つの悪夢」

Webムー「☒オーパーツ 不思議空間☒でOリングテストによるパワーストーン選びを体験／辛酸なめ子の☒魂活巡業」」

Webムー「美術、歴史、妖怪伝説まで…香川県立ミュージアム「おとろしいもんー「こわい」をめぐる歴史と美術」展が開」

Webムー「『和漢三才図会』からモフモフのものを読む…毛深き獣人譚／妖怪補遺々々」

TOCANA「激動の時代をどう生きるか？金融・不動産・スピリチュアルの専門家が結集し、“これからの日本”を語る「」

TOCANA「【原因不明】ChatGPT・Claude・Gemini・Grokが同時ダウン！世界が「自分の脳」を」

TOCANA「月は「たった5時間」で誕生した!? 45億年前の巨大衝突をめぐる定説を書き換える新シミュレーション」

編集後記

今週は米政府がUAP科学諮問委員会に「非人間的知性確認時の準備計画」の存在を伝えたという一件が最大の話題となった。フェルミ・エクスプローラー計画や球体UAP回収疑惑など宇宙関連の話題が相次ぐ一方、アルゼンチンとブラジルではそれぞれ異なる時代・場所で家畜・人体のミュートレーション事案が報告され、半世紀来の謎が再燃している。UMA目撃談やAIをめぐる新種の心霊現象「スパイラリズム」など、テーマは多岐にわたる一週間だった。

本紙は複数の公開情報をAIおよびHATAKITIが整理・編集したものです。元記事本文の転載を目的とせず、掲載内容の真偽を保証するものではありません。文責：チャッピー